

2008 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞(附属図書館長賞)受賞

レポートの丸写しと大学生の意識

経済学部 1 年 奥田 ゆかり

I. はじめに

大学生になり、レポートを書く機会が格段に増えた。書き方も教えられないままいきなり提出を迫られることも稀ではなく、戸惑うことは無理もない。そのような状態の中、友人などのレポートを丸写ししたり、web サイトに載っている文章をそのままコピー&ペースト、いわゆる「コピペ」をしたものを自分の文章として提出したりすることが、大学生のレポート作成においてよく見かける問題となっている。コピペを発見するPCソフトまで開発され、教師が手を焼いている問題だといえる。

レポートの課題を出される際、教員から友人のレポートを写したりコピペをしたりすることは禁止すると念を押されることもあり、また、ほとんどの論文のノウハウ本にもしてはいけないことだと明記してある。しかし、実際には多く行われているのである。なぜこのようなことが起こるのだろうか。

レポートは大学生活において避けては通れないものである。レポートについての大学生の意識を調査することで、大学生の学問への姿勢を明らかにできると考え、調査・研究を進めた。

II. 先行研究

論文とは、「ある問題についての、自分の主張をなんらかの調査に基づいて、合理的な仕方 で根拠付けようとする、一定の長さの文の集まり」(小林康夫・船曳建夫、1994)である。したがって、自分の意見のないものは論文とはいえない。

コピーを剽窃という言葉で表している戸田山(2002)は剽窃を次のように種類分けをしている。

- ①丸写し：友だちの書いた論文をすべて、あるいは一部写して、自分の書いたものとして提出する。あるいはネット上のサイトに公開されている文章を、すべてあるいは一部コピーして自分の書いたものとして提出する。
- ②自己剽窃：自分の書いたものであっても、複数の授業に同じ論文を提出すると剽窃の一種と見なされる。
- ③無断借用：最も重要な論点やアイディアを、参考文献あるいは引用文献として言及せず に他の論文から借用する。

多く見かけるのは①と③であるが、本論文では①を主に取り上げたい。

なお戸田山は、「人がそれなりの努力を傾注して調べたり考えたりして到達した真理・知識は、基本的には人類すべてのものとして共有されるべきである。しかし、その代わりに、それを生み出した人にはそれ相当の尊敬が払われなければならない。」と述べ、剽窃を批判している。

論文は、多くの場合自分の意見を裏付けるために引用文献を用いるものであり、その引用に当たっては注意を払わなければならない。引用元を書くか書かないかで大きく異なってくる。丸写しという言葉にすると、多少言葉のニュアンスで軽く感じられるかもしれないが、

度合いに関わらず盗作・剽窃と表現することができ、著者や作者に失礼だけでなく法律で禁止されている犯罪行為である。

どのような犯罪行為かというと、法律の面から丸写しで問題となるのは著作権法違反である。著作物というものは、著作権法2条1項に「著作物 思想又は感情を創作的に表現したものであつて、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものをいう。」と明記されている。そして林幸助(2008)は「著作権は「もの」である著作物に「物」と同じ価値を与え、さらに著作者の名誉まで含めた権利として認識され、法律による制度や社会のルールとして定着してきた」とした。定着しているにも関わらず線引きが難しく、文学の世界などでは裁判で著作権侵害と認められない判決が多く出ている。「ある程度以上の分量を丸々写しているとか極端な場合以外、法廷で争われたとしても著作権侵害にはおそらく問われないだろうという推測が成り立つ。」(栗原裕一郎、2008)という理由だが、しかし文学と違い今問題としているのは学生のレポートであり、丸写しや大半を写す行為を対象としている。すると上の「ある程度以上の分量を丸々写している」という場合に当てはまる。逆説的に著作権侵害に問われるれっきとした犯罪行為であるということになる。

Ⅲ. アンケートの目的と方法

先行研究や論文を書く際の常識・道徳的観念から、丸写しは絶対してはいけない行為であることがわかっている。しかし、実際は大学生が丸写しをすることが問題となっていて、社会的認識と大学生の意識には差異があることがわかる。

問題となっているといっても、実際にはどのくらいの大学生がレポートの丸写しをしたことがあるのか、本当に問題になるほどの割合で起こっているのか、まず根本から知る必要があり、調査した。また、大学生が丸写しを剽窃だと感じるのか、また、実際丸写しをしたことがある人としたことがない人の考えの違いは何なのだろうか。社会的共通意識を、「丸写しは剽窃でありしてはいけないこと」だとし、その考えと大学生の考えの相違や、大学生自身の意識と実際の行動の違いなどを明らかにしていきたい。以上のことを考察するため、1・2年生の大学生50名を対象にアンケートを行った。以下の全ての結果において、男女間の差はあまり見られなかったため、まとめて表す。

Ⅳ. アンケートの結果の考察

(1) 大学生の丸写しに対する根本意識と実情

丸写しはしてはいけないことだという意識はそもそも大学生にあるのだろうか。まずその調査結果を以下に表わす。

〔図 1〕レポート作成時、丸写しはしてはいけないことだと思いますか

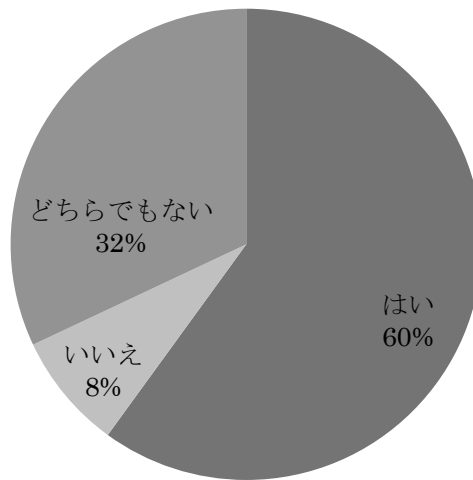


図 1 から、過半数の大学生が丸写しは良くないと思っている。しかし、4 割もの学生がはいえまたはどちらでもないと答えているところから、意識の低さがわかる。

次に、実際の経験を聞いた。

〔図 2〕レポートを作成する際、友人のレポートを写したり、web サイトから引用元を示さずコピペしたことはありますか

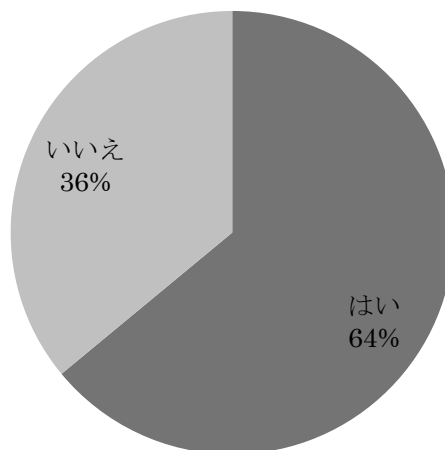
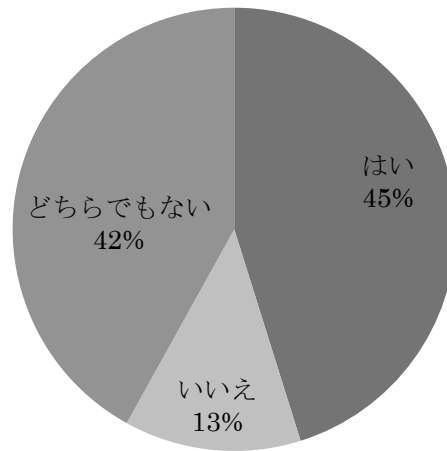
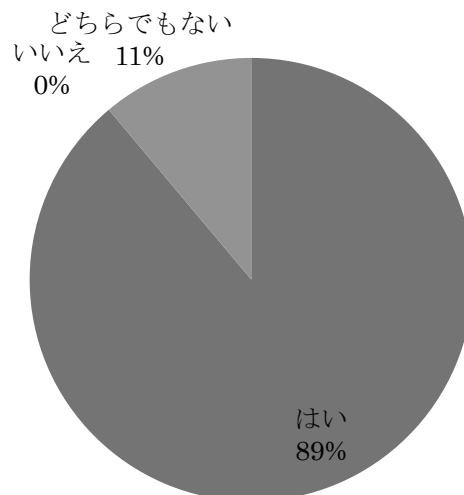


図 1 では過半数が丸写しはよくないと答えているにも関わらず、多くの人に丸写し・コピペの経験があるという結果が出た。丸写しをしてはいけないことだと思う人と、実際にもしたことがない人の割合にずれがあることから、よくないと思いつつも丸写しの経験がある人がいるのである。どのくらいの人がしているのか。実際に丸写しをしたことがある人とない人に分けて結果を見てみると、図 1 は以下のように分けられる。

〔図3 A〕丸写しはしてはいけないことだと思いますか
(図2の問いに「はい」と答えた人)



〔図3 B〕丸写しはしてはいけないことだと思いますか
(図2の問いに「いいえ」と答えた人)



社会的意識に反して、図3 Aでは丸写しがいけないことだと思っている人は半数以下となっている。しかし逆にいうと、丸写しをしたことのある学生の45%はいけないと思いつつ丸写しをしているということになる。また、それとほぼ同数の学生がどちらでもないと答えているのも目立つ。社会的意識では丸写しはしてはいけないことだとは思っているが、実際自分がしているので「はい」とは答えきれず、しかし「いいえ」として正当化することも出来ない人が「どちらでもない」を選んだのではないのではないかと考えられる。

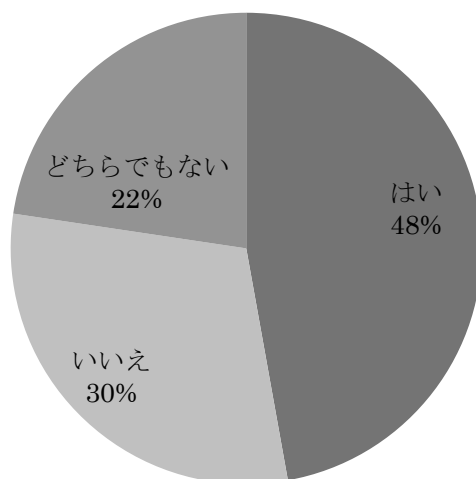
ここで、『丸写し』という言葉にどの程度の幅を持たせるかを明確に定義しなかったため、回答者の『丸写し』という言葉への認識に差があるかもしれない、もし定義していたら結果が変わった可能性があることをお詫びしたい。

続いて、なぜ丸写しをしてはいけないことだと思わないのか、さらに調査していく。

(2) 丸写しと剽窃

先行研究で明らかになっているように、丸写しはれっきとした剽窃であるとされている。しかし、大学生の実際の意識はどのようなのだろうか。

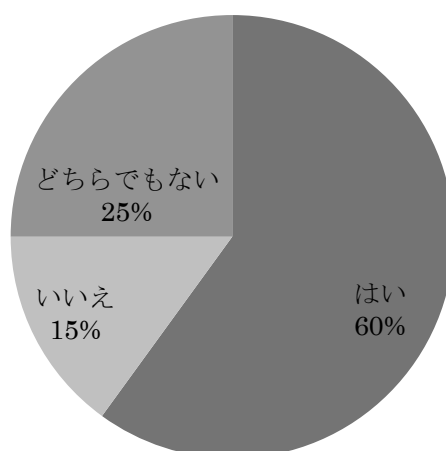
[図4] 丸写しは剽窃だという意識はありますか



驚くべきことに、大学生の意識では違うのである。丸写しが剽窃だと思っている人は47%と、半数以下となっている。聞き取り調査をしたところ、そんなにおおげさなものではないという回答をいくつか得た。この結果を見ると、図1の意識の低さにも納得がいく。

また図5は、丸写しはしてはいけないことだと答えた人にしぼり、丸写しに対して剽窃という意識を持っているかどうかをまとめたものである。これを見ると、丸写しをしてはいけない理由は剽窃だからだと答えた人は60%であり、残りの40%は必ずしも剽窃だからしてはいけないというわけではないといえる。

[図5] 丸写しは剽窃という意識はありますか
(丸写しはしてはいけないことだと答えた人)



丸写しが剽窃という意識にあまり結び付いていないことが表れる結果となった。

丸写しをしない理由としての剽窃を見てきたが、逆に丸写しをする理由は何なのか、次での項目でさらに調査する。

(3) 丸写しをする理由

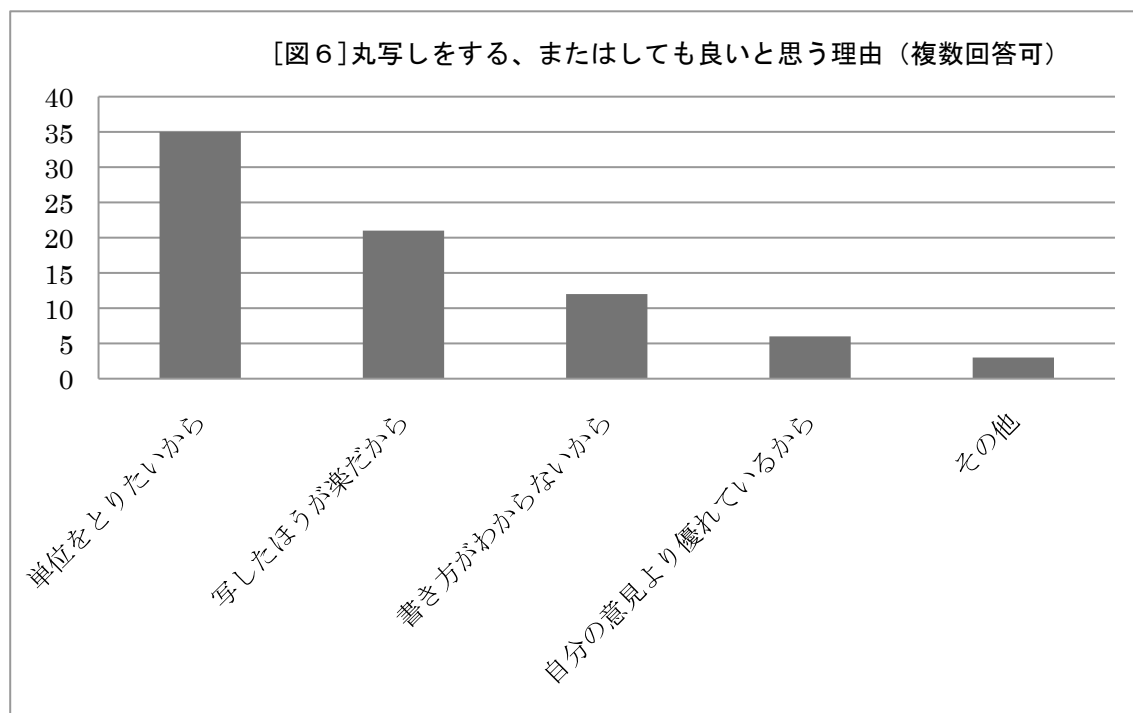


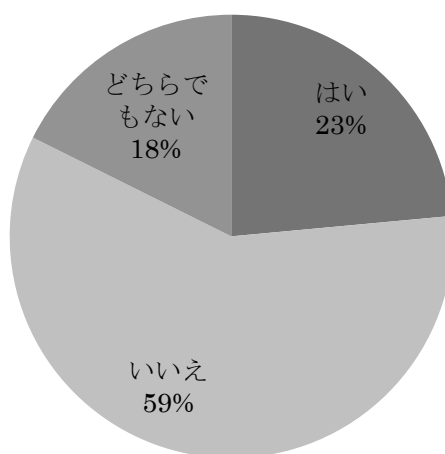
図6では丸写しをしたことのある人はした理由、したことのない人には万が一するとしたらその理由を聞いたものである。

これを見ると、唯一半数以上の人を選んだのは「単位をとりたから」という理由である。単位取得は学生の大きな問題だが、単位をとるために丸写しをするというのは写したほうが楽だからという逃げの姿勢の回答が多いことも気になる。

また注目すべきは書き方がわからないからという理由を選んだ人が50人中12人もいるということだ。アンケートの対象は1・2年生であり、もう後期も終りという時期なので少なくとも半年以上はレポートに触れてきたはずだが、この数字が出た。剽窃に対する意識も合わせて、そもそもレポートとはどういうものか、何をすべきか、また何をすべきではないかという教育が足りなかったのではないかと思う。

また、次の図7では丸写しをしたことがない人を対象に、教員に見抜かれなければ丸写しをしてもいいか聞いたものである。59%の人はいいえと答えた。その59%の人は倫理感からの理由で丸写しをしていないとわかるが、アンケート回答者全体からみると約20%しかいない。丸写しをしたことがない人でも、23%は見抜かれることを恐れて、つまり見抜かれて単位を落とすことを恐れているからしないだけなのである。

〔図 7〕教員に見抜かれなければ丸写しをしてもいいと思いますか
(丸写しをしたことがない人)



学習によって自分の力をつけることが目的であり、その結果として単位がもらえるという構図であるべきところが一転して単位をとることが目的になっているといえる。これは見直さなければならない教育の問題である。

IV. まとめ

授業で求められるレポートは、授業で得た知識を確認したり、授業外の知識を使って授業の知識を深めたり、また疑問に思ったことを自分なりに説き明かしたりするようなものが大半である。もちろん正しい答えも必要だが、そこで求められるのは自分の力でレポートを作り上げることだ。レポートを書く能力は、大学卒業後も様々な場で求められる。その練習も兼ね、教員はその時々々の学生たちの能力に合った課題を出しているはずである。レポートをただの単位をとるためだけの手段としてはもったいない。わからないからといって写すだけでなく、より身に付く勉強法を考えなければならない。それにはやはり自分自身の力が必要である。

そういったことを詳しく伝え、書き方やタブーを教え、倫理感を育てる機会を増やすべきだ。学生側の意識改善と、教員側の努力が求められる。

今回の研究では、丸写しをしない理由を深く研究できなかったのも、それについて今後考察を進めていきたい。

V. 参考文献

- 『論文の教室 レポートから卒論まで』 戸田山和久(2002) 日本放送出版協会
『ちょっと待って、そのコピペ！著作権侵害の罪と罰』 林幸助(2008) 実業之日本社

『〈盗作〉の文学史』 栗原裕一郎 (2008) 株式会社新曜社
『知の技法』 小林康夫、船曳建夫 (1994) 東京大学出版会

